

氏名(国籍)	モニカ レイネム (エストニア)		
学位の種類	博士(政治学)		
学位記番号	博乙第2397号		
学位授与年月日	平成20年9月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	<b>Content analysis of Prime Ministers' Speech: Japanese policy speeches from Katayama to Koizumi</b> (首相演説の内容分析: 片山首相から小泉首相までの日本の政策演説)		
主査	筑波大学教授	博士(法学)	辻中豊
副査	筑波大学教授	博士(政策・メディア)	伊藤修一郎
副査	筑波大学教授	Ph. D (IR)	赤根谷達雄
副査	筑波大学准教授	法学博士	竹中佳彦
副査	同志社大学法学部准教授	博士(国際政治経済学)	森裕城

### 論文の内容の要旨

本研究は、日本の国会において首相が行う国会演説（施政方針演説、所信表明演説）を網羅的に分析し、特にそのレトリックにも着目し、検討したものである。内外においてこれまで本分野の学術的研究がほとんど存在しないことから、筆者は戦後新憲法下、片山首相から小泉首相まで長期間にわたるすべての演説を体系的に検討している。

筆者が提示する議論は以下のことである。日本政治において、首相の国会での演説はどのような意味、意義を持つものか。新憲法下においてなされた演説すべて対象とすると、戦後直ぐの国家再建期から現在まで、それぞれの首相の演説から何を学びとることができるだろうか。強烈的な指導スタイルで著名な首相たちは他の首相たちとはどのように異なるのだろうか。大部分を占める自民党の首相と少数の非自民型内閣での首相での演説に違いはあるのだろうか。このような首相たちの演説はいかに分類し類型化できるのだろうか。分類がなされたとすれば、その分割線は何に基づくものだろうか。このように筆者のアプローチは、演説すべてから帰納的に事実発見を導き出そうとするものである。

論文の全体は6つの部分からなり、序論、第1章 先行研究、第2章 方法論とデータ、第3章 演説の量的分析、第4章 質的分析：政策問題への焦点、結論、そして文献目録、付録から構成され、本文181頁、全体では276頁である。著者が用いる素材は、片山哲首相から小泉純一郎首相までの新憲法下においてなされた首相の演説すべてであり、そこには25人の首相による145の演説が含まれている。

著者が用いる方法は2種類である。一つは量的分析であり、KH Coderという日本語語彙分析プログラムを用いて内容分析し、語彙の頻度を検討し、主成分分析やクラスター分析、多次元尺度法を併用して、首相ごとに分類しようとするものである。もう一つは質的な要素を加味して、各首相ごとに、各演説を具体的に読み込み、その内容構成を全体として検討するものである。

また量的・質的方法を用いて著者が焦点をあて分析するのは、首相国会演説の2側面、内容とスタイルで

ある。2つの側面が量的にも、また質的にも分析される。

まず第3章において、量的分析を行うが、そこでも、2つの方式で内容を分析している。

一つは、一定の、意味の一義的でない語彙（「する」「ある」など）を省いた対象の分析と、それらすべてを対象とする分析である。前者が内容の分析に関連し、後者がスタイルの分析に連なる。

主として多次元尺度法を用いて、首相演説が基本的には時代の推移とともに一定の方向への分布の動きがあることが観察され、ほぼ時代順に分類できる、としている。特に一定の語彙を省いた内容に関する分析でこの規則性は明瞭である。このことから日本における首相演説の、時代への対応・受動性、政策の連続性と慣性を指摘する。第二に、こうした時代軸にそって、3つの主要集団、フェイズを著者は発見する。

第一集団は片山から佐藤首相。ここでは「国民」が最も特徴的であり、国家、国会、民主主義、内閣、産業、生産などの語彙頻度が高い。

第二集団は、70年代の田中から三木、福田、大平、鈴木首相。ここでは、「友好」が最も特徴的であり、関係、安定、協力、相互、不況、経済条件なども頻度が高い。

第三集団は中曽根から小泉首相までであり、ここでは「社会」が最も重要な語彙であり、改革、地域、課題などの頻度も高い。

なお細川首相以降、いわゆるポスト55年体制の首相の位置は徐々にバラバラになっており、相互の間隔が広い。こうした3分類は、先行研究の分類とも、またいわゆる55年体制、その終焉の歴史的区分ともほぼ符合する。

他方、「する」「ある」「ない」などを含めた演説スタイルに力点を置いた分析では、「する」を多用する首相群に特徴が見出される。断言型のレトリックスタイルを用いる首相（小泉、田中、岸など）は時代の流れからやや突出した位置に布置される。小泉首相はとりわけ、一文の長さが最短であり、「改革」と断言する動詞「する」に特徴をもつ。また細川、羽田、村山など非自民型内閣の首相は「改革」を多用するが平均より「する」は少ないなどの意味深い特徴を抽出している。演説の内容というよりスタイルの違いによって、逆に各首相、内閣の特徴を析出している。

筆者は、第4章において、質的な分析として、さらに各時期において代表的な首相を2名ずつ抽出し、それに小泉首相（一部、田中首相も）を加え、演説の内容をより質的文脈的に検討し、それぞれの集団が時代によって突きつけられた課題にいかに関与して取り組もうとしたかを検証している。この質的方法から、「ビジョン派」(visionaries)と「国際派」(internationalists)という類型を提出している。前者は、演説の中にはっきりとしたビジョンに関連する内容を盛り込んだ首相であり、後者はそうしたものを欠きつつもっぱら国際情勢に力点を置いた首相である。分析したうちビジョン派に属するのは、岸、(田中)小泉であり、国際派は、福田、村山である。岸にあっては、教育、治安と暴力、労働、民主主義などが、小泉にあっては改革、IT戦略、無駄ゼロなどの新しい理念、地域政策が強調される。またこの4章の最後に、著者は各首相の第一演説のみの分析、第一演説を除く分析をいずれも量的に行い、更なる分析の可能性と質的データとの関連性を指摘する。

結論として、時代軸にそった分類、類型化が可能であること、すなわち首相の演説は政治・経済的な時代の環境を濃厚に反映しているし、また各首相は、主体的というより反応的であって、前政権からすでに提示されよく定義づけられた問題を、演説でも取り上げる傾向があることを示唆する。演説のスタイルにより重点をおいた結論として、「する」といった断言的な語彙が首相演説スタイルにとって重要なことが指摘される。質的な分析からも、強く積極的なレトリックを用いる小泉、田中、岸といった首相が、強い国内争点を纏まりとして提示することが指摘される。「する」といった断言的語彙を用いることの少ない福田、村山、宮沢は逆に国際的問題に力点を置く傾向にある。イデオロギーに関しては、伝統的な左右分裂線は検出されず、社会民主主義が主要な争点でなかった、逆に言えば全包括型政党としての自民党ゆえに野党と共有されてい

たことが示唆される。著者はこのようにいくつかの方法を併用した分析によって、演説スタイルの分析が日本の政治において首相を位置づける新しい方法の一つとなりうることが示された、と考えており、特に特定の概念範疇を用いず全体を分析していった論文の手法が実り多いものであったと締めくくっている。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、日本の戦後新憲法下における首相国会演説すべてを対象とした、初めての体系的な研究である。首相の演説は、その形式性や内閣官房の主導性という先入観から、十分な研究対象となつてこなかった、ある意味で極めて重要な研究の空白領域である。その意味で本論文の意欲、また外国人である著者が試みたという勇氣は高く評価されなければならない。他方で、そうした野心的な挑戦の反面として、国会演説すべてに注目し、そこから帰納的に分析を行うという方法、また長い時期すべてを研究対象としたことから、全体として歴史的・論理的な関連付けが弱いという傾向も指摘できる。歴史的な知識と分析的な発見を結びつける過程や論理にやや飛躍が見られるのは仕方のないことであるがやや残念である。こうした難点にも関わらず、本研究は、全体として、いくつかの重要な、全く新奇な事実発見とその解釈におけるユニークな仮説を提示しており、これまで現代日本政治研究に欠けていた新しい研究領域とその方法、手法を外国人の観点から導入した、極めて意欲的な研究と位置づけることができる。

よって、著者は博士（政治学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。